

関西大学博物館実習展（講評）

日程 2014年11月9日(日)～11月14日(金) 10時～16時

場所 関西大学博物館特別展示室（簡文館内）

アールヌーヴォーと日本

- 展示資料は入手がむずかしい立体物をさがして苦労したことがわかる。展開を展示資料に頼りすぎ。アールヌーヴォーの魅力をもっと強調してもよかったのでは。
- 展示は丁寧で、ストーリーの展開もよいと思う。もう少し大きな章ごとの展示解説を充実させるべきか。
 - それまでの芸術との違いや歴史的意味が、話を聞くと理解していることがわかるが、展示だけではわかりにくかった。
- 平坦さ、色彩の明るさなど、限られた展示品の中でよく表現できていると思うが、それとわかる説明が十分でない。
- 細かいところに、もっと踏み込んでほしい。
- 品物はよいのだが、キャプション解説が少ない。アールヌーヴォーとはどんなものかが、見学者にわかりにくい。解説してもらっても理解してもらえなかったようです。展示解説は全点の説明は用意していたが、全体の5分程度の説明は用意できていなかった。
- 何故アールヌーヴォーが日本でも受け入れられたのか、時代背景への言及が必要。
- アールヌーヴォーの歴史を並べたのは良い。しかし、ミュシャが突然出現するのは一般の人には理解できない。キャプションの文字が小さい。
- - キャプションの文字が小さすぎ。特に地模様が入ったものは読み難い。キャプションのないものがあり、わかりにくい。
 - 展示は本物か複製かの区別が重要なのできっちり明示すべき。
 - ケースの都合上、順番に並べられないことも多いが、それがわかるような工夫が必要。
 - 章立ての会場解説と図録が一致していない。
- メインの展示品がなかった。テーマが大きい。展示はすっきりしたものになっている。
- 図録はよく出来ているが、展示解説との落差が少し大きい気がする。バッグ、印鑑ケースのダイセンに年代他が入っていない。
- 資料の扱いにもう少し説明が必要では？（明星との比較の所など）
- 美しく展示しようということに引っぱられすぎた。展示作品の量とバランスの問題。イス、立体と平面の組み合わせ。キャプションの位置がバラバラで一定していない。
- 大項目サインが独立していない。展示にメリハリがない。暮らしの中のアールヌーヴォーが導入の方がよいのでは？
- 図録のデザインや構成はよくできていると思う。展示品が少ない。そのため、アールヌーヴォーの何を伝えようとしているのかが、今ひとつ伝わらない。

神になった人間—菅原道真—

- 資料研究が不足。「渡唐天神」の描かれるようになった背景など、道真像を深めることもできず。ポスターのデザインはいい。
- いろいろ展示資料があるのに、決定的に解説不足でモノの陳列に終わっています。
- ・ポスター及びタイトルからは、神格化された（歴史上の）人物について論じられていると思うが、実際はほとんど菅原道真に特化している。
 - ・いろんな神格化された人物がいるはずだが、その中で何故道真に絞り込んでいったのかという流れの説明がほしかった。自分たちの勉強した流れのまま進めてきたらしい。
- タイトル“神になった人間”が？ 調べ学習成果の発表にとどまっているところが残念。
- ・展示の意図がわかりにくかったのでは。能面は目立っていたがcaえて掛軸の印象が薄くなった。
 - ・展示説明を受けると、最後の絵馬などを並べている意図はわかるが、展示を見ただけでは不明。展示解説はよくまとまっていた。
- 天神画像の各様について、信仰とからめての説明が要。渡唐天神など時代的变化が押えられていないのは残念。
- 道真の何を見せようとしているか不明。道真の信仰なのか？ 信仰の歴史なのか？ よくわからない。キャプションの文字が小さくて見にくい。
- ・章立てはよい。せっかく章を分けているのに、会場にそれを掲げていないのは残念。章立てと展示順が一致しなくても、それは工夫次第で。
 - ・キャプションの解説がないものが多いが、あった方がよい。（「作品より目立つ」という意見が出たため途中で取ったとのこと。）
 - ・絵画、版画、面、文書、最近のもの種類が豊富で面白い。
- 内容と展示品が一致していない。
- 渡唐天神図が図録に入っていない？ 展示のダイセンと図録のダイセンに少しちがいがあある。図録の天神さん人形の解説を含めたあつかいと展示に落差がある。（少し大きいのでは。）
- ・説明がもう少しあってもいいのでは？ 図録を見ると、構成がよく分かった。
 - ・地図が小さくて見えない。
- 軸と立体の展示バランス。天神人形は一番身近な存在。一点だけでも入れてほしかった。
- 大項目サインがない。展示も内容も散漫である。
- 図録の表紙とポスターはインパクトがある。図録の表紙裏（表2）と裏表紙裏（表3）に記述があるが、ここは白紙であるのが一般的。もう少し工夫がほしかった。展示ケースに配置されているものが、どういう意図をもって並べられているのか。概略的な解説がなされていないため、ただ物が並んでいるだけになっている。解説者や図録がなくても理解できるようにしなければならない。言葉足らずの展示である。

大阪・堺・阪堺電車～都市をつなぐ道～

- ポスターの線路はおもしろい。資料の細部（鳥瞰図、吉田初三郎の案内図）を見るための工夫があればよかった。

- 阪堺電車の展示なのか、沿線の名所の展示なのか、展示の主旨を明確にすべきでは。
- - 説明が細かすぎ、文字が小さくなって読みづらい（図録）。
 - 阪堺電車に絞るならば、「都市をつなぐ道」ではなく「街（町）をつなぐ道」ではないか？
 - 歴史的役割の説明の中でも、大阪という都市のネットワークの説明と地域との密着の説明のつながりがわかりにくい。大きくとらえるか、狭い範囲に絞り込むのか、整理ができていない。
- パネル、展示物は個々には良かったが、全体の統一性に乏しいように思う。
- - 阪堺電車とありながら、鉄道のことだけでなく、沿線の案内が主となっていた。展示側の意図はそのようだが、テーマのタイトルを見てきた人はがっかりすると思う。
 - 展示解説を見ていると、路線図と年表を入れ替えた方がよいのでは。
 - 図録に路線図がない。
- - 身近なテーマはおもしろいが、何故このテーマを選んだかの説明が必要。図録に路線図・駅の説明要。
- コーナーごとのパネルの文字の量が多い。また、題の文字と説明文字が読み難い。年表で、会社が合併で変わる部分は色を変えてわかりやすくした方が良いのでは。最後の2ケースは意図がよくわからない。
- - 図録の表紙、建物はともかく電車を斜めに配置するのは安定感が悪い。（事故などを連想してしまう。無意識でも）
 - キャプションの字が小さすぎる。
 - 図録は図版が大きく見やすい。解説文はもっとあった方がよい。「地域」を意識している点は良い。
- 展示品に重みがない。
- 図録に路線図がほしかった。ダイセんに色線が入り、コーナー分けをしているのがわかるが、項目解説パネルも同様に色分けをして、コーナー分けを明確にした方が良い。
- - 構成が散漫な印象。「都市をつなぐ道」という副題は構成を示しているか？
 - 地図（初三郎）がケースの奥で見えない。
 - 地名など、どこにあるのか示しては？
- 地域住民のインタビュー、聞き取り。展示についてはバランスがとれている。
- 大項目サインがない。第5回内国勸業博覧会の大浜と天王寺の関係を強調。
- 図録の絵はがきはサイズにばらつきがあるのと、空白が目立つページもあり、配置にもう少し配慮があったらよかった。それ以前のグループの展示と順路が逆になっているため、逆回りで見始めてしまった。順路の表示が必要である。絵はがきをはじめとして、平らなものが多く、平面的な展示になり、面白味に欠ける。

一九六三 あゝ映画

- 看板の展示など演出はいい。映画館の分布図の意図が不明。看板絵師のコラムが取れたのもいい。映画産業を支える人にも目配りした点は評価したい。
- 展示タイトルの内容が展示品で説明できていない。展示品が少なすぎたのではないか。会場

の制約から、絵看板を生かせなかったのが残念であった。

- • 映画の衰退は言い古されたことなので、その分析には新しい視点が必要。
- • 今の映画の新しい動きや、テレビ界の硬直化との比較などに踏み込んでも良かったのではないか
- • 斜陽化を前面に出すなら、年配の人たちの盛んな時代のエピソードなどの取材がもっと必要かもしれない。
- テーマ設定、展示内容がやや散漫な印象。
- • 1963年の意味が見に来た人には伝わらない。新聞記事のパネルや映写機の写真が平ケースに並んでいるのはもったいない。品物をならべてほしい。
- • 映画館の分布図とあるが、この図は分布図になっていないのでは。
- • 最終日になっても全般解説（5分程度）の準備ができていない。
- • 半裁ポスターの「半裁」が一般の人はわからない。「映画ポスター」でよいのでは。
- 現代社会に映画は必要か、展望も言及してほしい。映画の復権は可能か。テーマと内容が不整合。
- 1963年に絞ったのは良かった。まず小津安二郎から始めるべきでしょう。斜陽を現在までつなげたグラフにしてほしかった。映写室は良かった。
- • 「一九六三 あゝ映画」を使うなら、タテ書表記の方が良かったのでは？
- • キャプションの解説がなさすぎる。図録、解説者なしでもわかりやすくすべき。
- • 図録は作品がメインであるべき。解説中の図版にみえる。
- • 楯彦の没年を取り上げる意義をもっとわかりやすくすべき。
- タイトルと展示内容が離れている。
- なぜ「一九六三 あゝ映画」というタイトルなのか、もうひとつピンとこない。内容と想いはよくわかるのだが…？
- • 「映像」の展示の難しさ。面白い切り口だが、「1963」年がどこまで効いているかが微妙。
- • 60'sの映画文化を伝える内容にはなっている。タイトルとの関係を再考しては？
- 図録のボリュームあるのに、取材対象の映像化がないのが残念。岩下志摩デカすぎる。導線の問題。
- 1963年の強調の仕方に難あり。第4章のサイン位置に工夫が必要。斜陽化グラフがおもしろい。TVに写っているアトムでは？
- 和数字の横組み表示に違和感を覚える。図録は細かい字でぎっしりと記述されているが、少し詰め込みすぎか。コラムは楽しかった。図録に比べて展示は今ひとつ。映画のおもしろさ、映画館へ行くワクワク感が伝わってこない。

総 評

- 全体に平板な感じで、特に展示物品と解説との主従関係に差が感じられない。つまり自分たちの調べたことの発表が主で、展示している「物」が何であるかが前面に出し切れていない感じが多かった。特に地図とかポスターのような平板なものは解説との区別があいまいになりかねない。

- • 面白いコンテンツが集められているが、「展示だけ」では意図が伝わらない印象が残る。
ある程度展示だけでも分かるようにした方がいいと思える。
- タイトルと展示構成は合っているか？
- • ポスターの照明設備を準備する。
- パーテーションに据えつけ。
- 全体にストーリー性がうすい。きれいに収まっている。